

第四十五回（令和七年度）

座間市中学生の主張作文コンクール入賞者作品集

中学生の主張

座間市青少年問題協議会

は　じ　め　に

座間市青少年問題協議会会長

座間市長 佐藤 弥斗

次の世代を担う青少年が、一人ひとりの役割と責任を十分に自覚し、心豊かで逞しくそれぞれの夢に向かって成長していくことが私たちの心からの願いです。

青少年が成長していく過程において、人との交流や奉仕活動をはじめとする多彩な体験活動ができるように、家庭・学校・地域が連携して社会環境を整備し、青少年の自立心の醸成と健全化などに取り組むことが最も重要なことであります。この一環として本年も、座間市青少年問題協議会では、第四十五回「中学生の主張」作文を募集いたしました。中学生が日常生活の中で様々な体験を通して将来の希望や大人への提言などを表現し、素直な気持ちで語られていることに深い感銘を受けました。多くの中学生から応募をいただき、その積極的な姿勢を高く評価いたします。この作品集が多方面で活用されることを期待しております。

最後に、本事業の実施にあたり、ご多忙のところ、ご協力をいただきました各中学校の先生方、並びに審査にあたられた皆様、に厚くお礼申し上げます。

第四十五回座間市中学生の主張作文コンクール入賞者

市長賞

「三十分ごとの夜が教えてくれた」

西中学校一年生

成瀬 隼一

議長賞

「ホテルで出会ったミャンマーの女性から」

栗原中学校三年生

グレアム 紗里

教育長賞

「恩返し」

栗原中学校三年生

和田 花凜

佳作

「他人のために出来ること」

栗原中学校三年生

村上 釉月

「私の人生の夢」

座間中学校二年生

高橋 佑祁

「祖父の背中を追いかけて」

栗原中学校三年生

新井 永伶菜

「残すために変える工夫」

南中学校三年生

郡司 笑里

「暑さと命、命を守るには？」

西中学校二年生

佐藤 葵

「命を考える」

栗原中学校二年生

原 暖

市長賞

「三十分ごとの夜が教えてくれた」

西中学校一年生 成瀬 隼一

私は中学一年生の四月に、母を癌で亡くした。母が入院したのは私が小学五年生のときだった。最初は「治る病気」だと思っていたけれど、病状は少しずつ進行し、母はどんどんやせ細り、声も弱くなっていった。

十二月に入る前、母は病院から退院し、最後の四ヶ月間を自宅で過ごすことになった。訪問看護を受けながら、家族と一緒に過ごす時間だった。でもそれは、「治ったから」ではなく「病院でできる治療がもうない」という事実の中での生活だった。

最後の一ヶ月は、薬の副作用でうまく話すこともできなくなっていた。母と目は合うけれど、声は出ない。口を動かしても、言葉にならない。私は母の目を見つめながら、ただ手を握ることしかできなかった。何もできない自分が、悔しくて仕方なかった。

ある日、私は給食を食べ終わった後で先生に呼ばれ、「今日は早退してください」とだけ言われた。理由は説明されなかったけれど、私はすぐに悟った。朝の母の様子を見て、「もしかしたら、今日かもしれない」と感じていたからだ。

急いで家に帰ると、家族の表情で全てを理解した。母は、私が早退する前に静かに息を引き取っていた。制服のまま、私は母の枕元に座り、何も言えずにただ泣いた。最後の瞬間に立ち会えな

かった悔しき、もつと言葉をかけていればという後悔、それでも届いていたと信じたい思いが胸に溢れていた。

そしてその夜、私は眠れなかった。悲しみと疲れの中で、三十分寝ては三十分起きるという状態を繰り返した。ふと目が覚めるたびに、母の顔が浮かび、隣の部屋の静けさが胸に刺さった。もう二度と母の声は聞けない。そう思うと、現実があまりにも重くのしかかった。

この出来事を通して、私は初めて「命の重み」を心の底から実感した。命は当たり前にあるものではない。今日ある命が明日もあるとは限らない。だからこそ、命は何よりも大切にされなければならぬものだと思う。

それ以来、私は人との時間をより大切にするようになった。日々交わす「おはよう」「またね」「ありがとう」という言葉が、もしかしたらその人と交わす最後の言葉になるかもしれない。そう思うようになったからだ。母が言葉を失ってしまった姿を見て、「伝える」ことの尊さを知った。

また、自分自身の命についても深く考えるようになった。中学生になると悩みや不安も増える。でも私は、「母が生きたかった時間を、いま自分が生きている」と思うと、どんなに苦しくても、命を投げ出してはいけないうるようになった。母の分まで、私はこの人生を大切に生きたいと思っている。

今の世の中では、命が軽く扱われてしまうようなニュースがあふれている。いじめ、自殺、SNSでの誹謗中傷……けれど、どの命も、たった一つのかげがえのない存在だ。たとえ見えなくても、それぞれの命には、その人だけの人生、その人だけの思いが詰まっている。

母は、言葉が出なくなっても、最後まで私に目で伝えてくれた。「頑張つて」「大丈夫」「あなたならきつと大丈夫」そんな想いが、母の目にはあったように思う。私はその想いをしっかりと受け取り、これからの人生を生きていきたい。

命には終わりがある。だからこそ、今この瞬間を大切に生きることが、命を大切にするということなのだと思う。今日ある命に感謝し、明日も精一杯生きようとする。それが、母が私に残してくれた教えであり、これからの私の生き方の軸になる。

私は、母が残してくれた想いと一緒に、自分の人生を歩んでいく。どんなに小さな一歩でも、それが命を大切にする一歩になると信じて。命は尊く、美しい。だからこそ、私はその重さを忘れずに、これからも生きていきたい。

議長賞

「ホテルで出会ったミャンマーの女性から」

栗原中学校三年生 グレアム 紗里

今年の夏休み、家族と訪れた海辺のホテルでの出来事です。母がチェックインを済ませると、お部屋へご案内しますと、若い二人の女性が私たちの荷物を持ち、前を歩き始めました。私ははつとしました。丁寧な日本語で挨拶してくれた彼女は、どこか日本人とは違う顔立ちで、私と同年代か、少し年上に見えました。部屋に入ると少したどたどしい日本語で館内の説明をしてくれました。そんな時母が、「お国はどちらですか？」と尋ねると、「ミャンマーです。技能実習生として日本語を勉強して、昨年十一月からこちらで働いています。」と教えてくれました。夏休みを楽しみむ私とは対照的に、一生懸命に働く彼女の姿は、私の心に強い印象を残しました。「どうしてこのホテルで働いているのだろう?」、「遠いミャンマーから、なぜ日本に?」、そんな疑問が次々と頭をよぎりました。これが、私が「身近な国際化」について深く考えるようになったきっかけです。

後で調べてみると、彼女のような人々が「技能実習生」として日本で多く働いていることを知りました。この制度は、日本が培った技術や知識を開発途上国に移転し、その国の経済発展に貢献することを目的としていると説明されています。しかし、彼女たちの多くは、故郷に残してきた家族のために仕送りをしたり、自

国の経済状況が厳しい中でより良い生活を求めて、海を渡って日本へやって来ているのが実情だと聞きました。

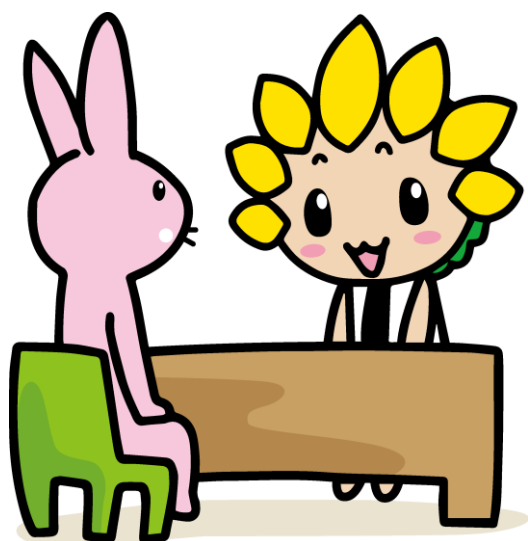
彼女の後には、故郷に残してきた家族の期待や、より良い未来を求める強い思いがある。そう思うと、笑顔で「いらっしやいませ!」と迎えてくれた彼女の姿が、ただのホテルの従業員ではなく、一人の人間として、とても素晴らしいと感じられました。

そして、この出会いは、日本の抱える大きな問題と無関係ではないことも教えてくれました。今の日本は、少子高齢化と人口減少が急速に進んでいます。私が大人になる頃には、働き手がさらに不足し、今ある社会の仕組みを維持するのが難しくなるだろうと言われています。特に、今回泊まったホテルのようなサービス業や介護、農業といった分野では、すでに人手不足が深刻で、技能実習生をはじめとする外国人労働者の存在が、日本の社会を支える上で不可欠なものとなっているのです。私たちが快適に過ごしているホテルも、おそらく彼女のような外国人労働者の存在なしには成り立たないのだと思います。私たちの身の回りには、知らず知らずのうちに、世界各地からやって来た人々が、日本の社会を、そして私たちの生活を支えてくれている現実があるのです。しかし、同時に疑問も湧きました。私たちは、彼女ら「技能実習生」を、単なる「労働力」として見てはいないでしょうか。彼女らは、日本の人手不足を補うための「都合の良い存在」として扱われてはならないでしょうか。言葉の壁や文化の違い、そして故郷を離れて知らない国で働く孤独感など彼女らが抱える困難を、私たちはどれだけ理解しようとしているでしょうか。

「国際化」と聞くと、英語を学んだり、海外旅行に行ったりすることだと考えてしまいます。しかし、本当に大切なのは、目の

前にいる、言葉や文化、習慣の違う人達を一人の人間として尊重し、理解しようとする事なのではないでしょうか。私たちは、彼女らがなぜ日本に来て働いているのか、彼女らがどんな思いを抱いているのか、理解する必要があると思います。

夏のホテルの会いは、私にとって「国際化」が、遠い国の話ではなく、私たちのすぐ近くで、今日この瞬間も進んでいる現実であることを教えてくれました。日本の人口減少が進む中で、これからますます多くの外国人が日本で暮らすようになるでしょう。その時、私たちは彼女らを「外国人」と区別するのではなく、共に日本の社会を築き、共に未来を創造していく「仲間」として受け入れていかなければならないと強く感じました。



教育長賞

「恩返し」

栗原中学校三年生 和田 花凛

私は周りの人を大切にし、日常の全てに感謝できる人でありたい。そう考えるのには強い思いがある。

私は生まれた時に非常に危険な状態で、そのまま死んでしまうか、一生人工呼吸器が必要など何かしらの障害を持つことになると言われていたらしい。妊婦検診で判明し、急遽医療センターに行って産むことになったと母から聞いた。もちろん私はその出来事を覚えていないし、日常で特に意識することもない。

だが、最近ふとその話を思い出して病院のブログを遡り、私に関する記事を見つけた。「NICU卒業生の笑顔」「過去からの励ましに感謝」という題名の記事は、退院後に検診に行った一歳の頃の私や、コロナ禍で小学校が休校だった時期に病院へ向けて書いた私の手紙が紹介されていた。

「動脈管早期収縮症を解明したい。早期診断や早期治療を目指したい。花凛ちゃんの姿を見るといつもそういう気持ちになります。」

「花凛ちゃんの成長ぶりに当時を思い出し、感動しました。勇気をいただきました。」

先生の言葉に私まで感動し、もっと自分が生まれた時のことについて知りたいと感じた。そこで、私が入院中に先生や看護師さ

んに書いてもらった日記を母に出してもらった。

「引き出しの中にノートを発見！ちよっとドキドキして書いています。」という文章から始まるその日記は

「早くお家に帰ろうね。」

「とうとう退院が決まりましたね。」

と温かい言葉で溢れていた。入院の最終日には

「明日いよいよお家に帰れるね。長かったような短かったような、嬉しいけど寂しいなあ。退院おめでとう！」

「きつと美人さんになるよ」

「お家に帰ったらきつと楽しいことがいっぱいだよ」

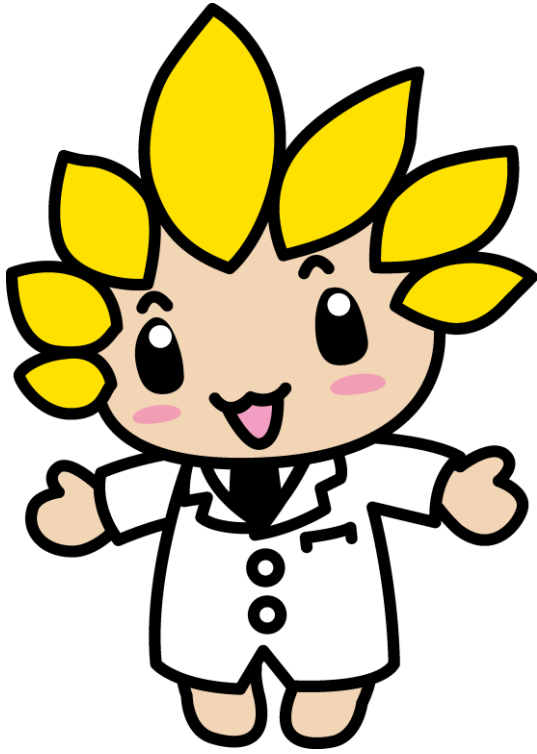
と何人もの先生や看護師さんからの心温まるメッセージが綴られていた。

たくさんの子どものうちの一人に過ぎないにも関わらず、こんなにも一生懸命に一つ一つの命に向き合ってくれた先生や看護師さんに感謝と尊敬の気持ちが込み上げてくる。しかし、同時に今まで何も知らなかったことや病院へ貢献できることがなかなか見つからないことに申し訳なさを感じた。恩返しをしたいという気持ちは強いものの、医療従事者になりたい訳ではないし、手段が分からない。

ならばせめて、先生や看護師さんたちが一つ一つの命を大切に、一生懸命向き合ってくれたように、私も周りの人を大切にしていきたい。困っている人に一生懸命向き合い、寄り添えるような人でありたい。

また、生まれた時の状態について知るうちに、今の生活がどれだけ幸せで奇跡的なことが実感した。たまたま助かっただけであって、もし状態に気づくのが遅かったら、と考えると恐ろしくな

る。当たり前前に学校に行けること、部活ができていること、おいしいご飯が食べられること、日常生活の全てが幾つもの奇跡が重なった結果のように思える。今ある生活に感謝して、この命を全うしたい。それが私が考えつく限りの最大の恩返しである。



佳作

「他人のために出来ること」

栗原中学校三年生 村上 釉月

私は小学生の頃、正直学校のトイレ掃除は嫌いでした。なぜかというと、匂いも気になるし、汚れている所に触れたくもなかったからです。だから当番が回ってくると「こんな見えない所までやらなくていいのに。」と思いながら、早く終わらせようと適当に掃除をしていました。

ある日、私はトイレで「いつもキレイに使用していただきありがとうございます」というポスターに目が止まりました。と同時に、清掃員さんが洗面台の鏡を丁寧に掃除していることに気づき、私は少し驚きました。毎日、あの人たちは誰も見ていない所で、私たちがやりたくないようなことをしてくれている。私たちが気持ちよく過ごせるように、誰も気づかないうちに働いてくれている。そんなことも知らずに、私は今まで「面倒くさい」「汚い」と不満ばかり言っていました。でもその瞬間、心の中で何かが変わった気がしました。見えない所で誰かがしてくれていることにちゃんと目を向けられる人でいたいと思いました。そして、自分も誰にも気づかれなくても少しでも誰かのためになるような行動が出来たらいい、そう思いました。次の日から、私はトイレ掃除をする時に、「次に使う人が気持ちよく使えるように」という考えをもって掃除するようになりました。それは、以前の私からすれ

ば大きな変化でした。

家でも同じようなことを考えるようになりました。親が夕食などを作ってくれたり、家事をしてくれたりすることは当たり前だと思っていました。親は仕事で疲れて帰ってきているのに、当たり前のように家事をこなしてくれている。改めてそのことに気づいた時、「自分にはどんな事ができるかな?」と思い、皿洗いやごはん作りなどを進んでやるようになりました。

社会の中にも、たくさん見えない姿があると思います。街のごみを拾ってくれる人、交通整理をしてくれる人、早朝からごはんを作ってくれる人。私たちが気持ちよく過ごせるために、誰かが人知れず動いてくれている。私たちの生活はその人たちの支えで成り立っています。私は、そういった姿に気づき、誰かがやってくれているから安心するのではなく、「自分には何が出来るか」を考え、行動できる人になりたいです。例えば、落ちているゴミを拾う、困っている人に声をかける、当番を忘れている人の分をかわりに行う。どれも大したことではない。でも、そういう小さな行動の積み重ねが、社会を少しずつ優しくするのだと思います。私が社会や他人のためにできることは特別なことでなく、周りにたくさんあると思います。「やりたくない」と思っていたことには、実は誰かを支える力があると思います。大人になったほうがきつと、誰かのために働く機会がたくさんあると思います。でも、それはいつも感謝されるわけでもなく、目立つわけでもないと思います。だからこそ、見えない姿を理解できる人でいたいのです。そして、自分も誰かの生活を支える側に立てるような人になりたいです。

私が社会や他人のためにできること。それは、見えない所で誰

か私たちの生活を支えてくれていることに気づき、自分もそっち側の人間になろうとすることだと思います。



佳作

「私の人生の夢」

座間中学校二年生 高橋 佑祁

私の人生の夢は好きな音楽ユニットのギターを手に入れてそのユニットの曲を自分で演奏できるようにすることです。その理由は、不登校だった私が少しずつ学校に行けるようになったことにも関係があります。

私は小学四年生の頃から不登校で、勉強が追いつけなかったりクラスの一部の人と馴染めなかったりと、様々な問題に悩まされていました。五、六年生となり、中学校のことを考えざるを得ない状況になった時に前述した音楽ユニットに出会いました。透き通った歌声で発せられる感情的な歌詞が当時の私の心境に大きな影響を与え、毎日の支えになってくれたことが鮮明に記憶に残っています。ある時、そのユニットのライブ映像を発見し視聴してみるとギター担当の人に目が行き、それから曲の中でギターの音色に注目するようになりました。

実は、私はギターを経験したことがあるのですがうまく上達せず辞めてしまいました。しかしこのユニットのことをきっかけにまたギターを弾きたいという気持ちが強くなり、再び始めてみることにしました。以前とは違いギターが夢と重なる存在になったので、現在も続けられているどころか生活に彩りを加えてくれる

趣味になっています。ですがいつも通りギターの練習をしている時、ふとユニットの人と同じギターが欲しくなったのです。その時、私の人生の夢を見つけました。これは私の人生の夢なので、自分のお金でギターを手に入れる事に意味があると感じました。もちろんお金を稼ぐには仕事やバイトをする必要があります。これまででは学校に行けず不安でいっぱいでしたが、将来的にこの夢を実現させるために一歩踏み出して少しずつ学校に行くようになりしました。近い将来だと、高校で軽音楽部に入学したいとも考えています。そのためにも、学校や勉強、ギターの練習に力を入れて取り組んでいく考えです。

しかしふとした瞬間に、完全に不登校だった頃、夢なんて遠すぎて生きるので精一杯な気持ちだったことを思い出して、このままギターを続けていて本当に夢に近づけるのだろうか、と考えてしまう時があるのです。けれどもあの音楽ユニットに出会って少しずつ変わることができた事実があるから、あの頃の自分に比べれば大きな違いがあるんだと信じて叶うまで夢に向かって歩き続けていきたいです。そしてそう思えるようになった今だからこそ、音楽だけでなく勉強にも真剣に向き合っていきたいと考えるようになりました。未来の自分のために知識を積み重ねたいと思えるようになったのは、あの音楽がくれた勇気が心の奥に根を張り始めた証だと感じています。

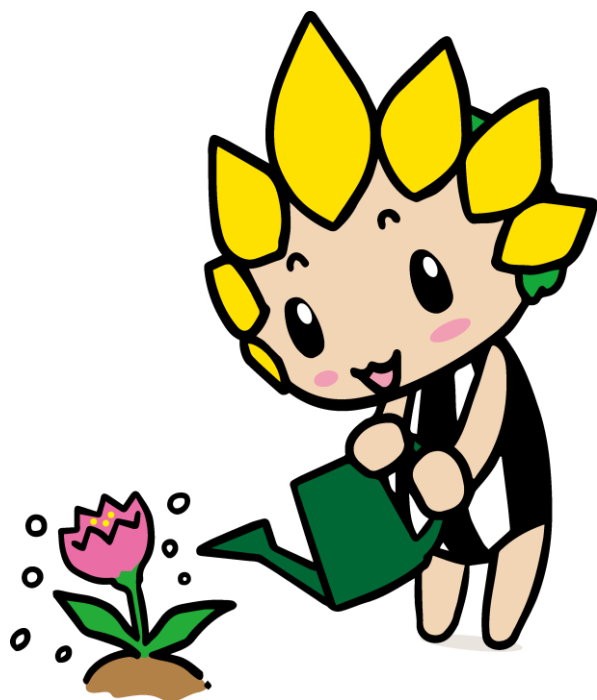
現時点ではギターは手に入っていないですし、演奏も完璧にはほど遠い状態です。けれども、今は夢があるから前を向けます。好きな曲を自分の音で奏でられる日を思い描きながら、これからも努力を重ねていこうと考えています。夢を叶えるのは決して簡単なことではないですが、過去の私が抱いた憧れを今の私が少し

ずつ形にしていくことができますのであれば、それはとても美しいものになると考えています。夢はまだ遠くにありますが、努力を続けていつか夢を叶えてみせます。

佳作

「祖父の背中を追いかけて」

栗原中学校三年生 新井 永伶菜



ウーウーカンカン——小学校低学年頃の私は、この音を聞くと祖父のことが不安でたまらなかった。私の祖父は元消防士だ。だから夜に消防車のサイレンを聞くと、「ちゃんと帰ってきてくれるかな？」と気がかりで、なかなか眠れなかった。「消防士ってかっこいい、すごい」。昔の自分はそんなふうに考えていたが、今思うとそんなに簡単な言葉でくくれるものではないと感じる。私の家は四世帯家族で祖父とも一緒に暮らしていたので、幼いながらに祖父の大変さをなんとなくではあるが理解していたつもりだ。

まず、祖父は泊まり勤務（当番制）で仕事をしていたため、一回仕事に行ったら一〜二日は帰ってこないのが普通だった。連続で仕事があったときは、帰ってきてまたすぐ仕事に行ってしまう。それがとても寂しく、心許なかった。家に帰ってきたときの祖父は行きの様子とは正反对で、毎回、どっと疲れた表情をしていた。仕事辛いのはもちろんだが、他人と生活するというのは短い日数でも予想よりはるかに気骨が折れると思う。もちろん、何十年もしていた仕事なので慣れもあるだろうが、家にいるときの祖父が一番生き生きしていたので、やはり家が一番なのだなと感じた。それに加え消防士という職業柄、仕事中は常に気を張らなければ

ならない。今、こうして祖父の仕事を思い返してみると想像以上の大変さに驚愕しているのだが、それと同等のやりがいを感じているようにも思えた。祖父が帰ってきてから夜に聞こえたサイレンの話をすると祖父が乗っていたということも多々あり、自分の祖父が市民を支えていることを実感した。そんな話を聞いたらその時の寂しい気持ちはどこかに飛んでいき、とても誇らしい気持ちで胸が昂った。

それから私が小学五年生の年、祖父は定年退職し、市役所の危機管理課で働くことになった。消防士だったときより少しだけだが仕事が楽になったようで、ほっとした。

これからは祖父と一緒に過ごせる時間が増えると思っていた矢先、不幸なことが起こった。祖父が新型コロナウイルスに感染し、そのまま息を引き取ったのだ。当時は今よりコロナによる死亡率が極めて高かったので、祖父がコロナに感染したことすら信じ難かった。それから祖父に会いたくて病院先に行ったのだから、面会ができるのは代表者のみという厳重な規則があつて会うことができなかった。コロナの拡大を防ぐためにある規則だと分かつてはいたが、それが憎くて憎くてたまらなかった。なんでこんなに人のために尽くしてきた祖父がコロナになったのだろうか…それからは気持ちの整理がつかず、学校も気が気じゃなかった。二ヶ月後、祖父の葬儀が執り行われた。そこで私は目を疑った。家族葬だと聞いていたのだが、顔見知りではない人が何人も葬儀場に来ていたのだ。そこで祖母や父が挨拶しているのを見聞きして、消防関係の方だと察した。祖父が亡くなったことを耳にして、駆けつけてくれたという。そのとき、何かがぐっと込み上げてきた。家にいた時は気づかなかったが、職場の人たちから「こんな

に愛されていたんだ。」と、祖父への信頼や親しみを身にしみて感じた。祖父とお別れをしてからも何人も職場の人が来てくれて、悲しさと嬉しきで涙が止まらなかった。

時々お墓参りにいくと、祖父のお墓に花が置いてある。その花が職場の方々が持ってきてくださったものだと思える時、つくづく愛されているなど本当に嬉しい気持ちで胸がいっぱいになる。

今はまだ将来の夢はないが、どんな職業に就いても「なりたい大人像」は変わらない。これからの社会を担う一員として、たくさんの人を支える大人になりたい。みんなに愛されるくらい、人を大切に尊重する大人になりたい。そんな大人になることを目標に、今日も祖父の背中を追い続ける。



佳作

「残すために変える工夫」

南中学校三年生 郡司 笑里

私は、文化財を未来に残していくためには「残すために変える工夫」がとても大切だと思います。

日本には昔からの歴史ある建物や場所がたくさんありますが、京都には特に有名なお寺や伝統的な建物が多く残っています。たとえば清水寺はその一つで、世界文化遺産にも登録されている、とても有名なお寺です。私も修学旅行で実際に行ってみて、多くの観光客が訪れる人気の場所であり、長い間大切にされてきた事が良く分かりました。迫力のある本堂や美しい景色に感動したことは、今でも覚えています。

けれど、清水寺のような建物も、ずっと同じままではいられません。木や漆喰といった自然の素材は、時間がたつと風や雨、虫などの影響で少しずつ傷んでしまいます。そのため、何度も修復や補修が行われているのですが、「どうして同じような修復を、何度もするのだろうか。」

と疑問に思ったこともあります。調べてみると、木材や漆喰などは長い年月で必ず劣化するもので、放っておけば建物全体の安全にも関わることがあると知りました。昔からの素材や技術を守ることはもちろん大切ですが、それだけでは文化財をずっと残していくのは難しいのではないかと思います。だからこそ、伝統を

大切にしながらも、新しい技術や素材をうまく使っていくことが必要なのではないのでしょうか。

たとえば、木材が腐ったりしないようにするための特殊な塗料や、漆喰に強さを加えるための成分など、今の技術を使えばもっと長く、丈夫にすることができるようになります。そうすることで、何度も同じ修復をする必要が減り、建物の保存がもっと効率的になるのではないかを考えました。さらに現在では、複合材料と呼ばれる技術も注目されています。これは、木と強い繊維を組み合わせたもので、木の見え目や風合いをそのままにしながら、強さや耐久性を高めることができるそうです。たとえば、柱の中は木でできていて、外側を高強度の繊維で包むことで、見た目は自然のままだけど、傷みにくくなるという工夫ができます。このように、昔ながらの材料の良さを生かしつつ、現在の技術で弱い部分を補うという発想は、とても良い方法だと感じました。

また、デジタル技術の力も文化財の保存に大きな助けになります。3Dスキャンを使うことで、文化財の正確なデジタルモデルを作ることができます。どこがどのくらい傷んでいるのか、細かい部分までくわしく調べることができるため、修復のタイミングを見極めたり、早めにメンテナンスを行ったりすることが可能になります。大きく壊れてから修復するよりも、早い段階で対処できれば、文化財へのダメージも小さく済みます。

もちろん、新しい技術を使うことだけが正しいわけではありません。伝統の技や素材の良さを忘れてはいけませんし、むしろそれをどう残すかが一番大切だと思います。だから、新しいことを取り入れるときには、文化財の見た目や歴史の重みをこわさないように、うまく調和させていくことが大切だと思います。伝統と現

いと思います。

代の技術の両方をうまく生かすことが、これからの文化財の保存には欠かせないと思います。また、修学旅行で歩いた祇園の町並みでは、昔ながらの町家がカフェや宿泊施設に生まれ変わっていて、とても印象に残りました。古い建物をそのまま使いながら、今の暮らしに合わせて工夫している所に、

「大切なものを大切にしよう。」

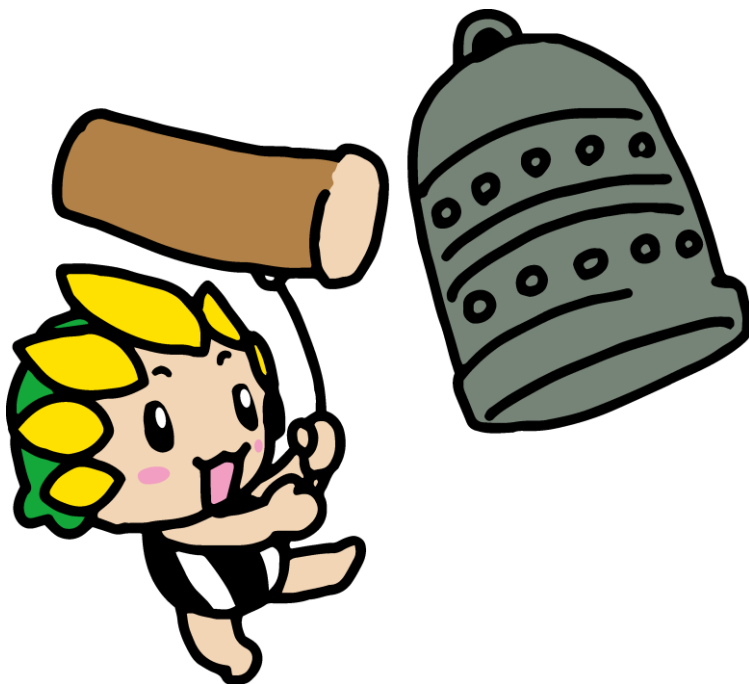
という気持ちが表れていると感じました。建物の高さや色にルールがあることも知り、町の人たちが景観を守るために努力していることが伝わってきました。

このような取り組みは、ただ建物を残すというだけでなく、どうすれば未来でも使い続けられるかを考えることが大切だということも教えてくれました。古いものを古いからと壊すのではなく、少し形を変えて思いを繋いでいくという気持ちが、文化をつないでいくのだと思います。

このように、文化財を未来へつなげていくには、昔の良さを残しながら、今の技術や考え方も取り入れることが大切です。伝統を守ることを、新しく変えていくこと、そのどちらか一つでなく、両方大切にしていくことで文化財はもつと長く生き続けられると思います。そして何よりも、私たち一人ひとりが文化財に関心を持ち、これからも残していきたいと思うことが、未来への第一歩になるのではないのでしょうか。学校で学んだことや、修学旅行で見つけたことをきっかけに、文化財を守ることに少しでも気づき、行動につなげていけたら、それが未来の文化を支える力になると思います。私も今回の学びを大切にして、

「残すために変える工夫」

を考えながら、これからも日本の文化や伝統に目を向けていきた



佳作

「暑さと命、命を守るには？」

西中学校二年生 佐藤 葵

暑い、暑いとにかく暑い。気象庁の情報によると、とうとう神奈川県内で三九・九度が観測されました。三十年前の一九九五年八月の最高気温は三二度だったそうで、約七度も上がっています。七度といってもあまり実感が湧かないと思いますが、お風呂の温度で考えてみると、なかなか暑くなっていると感じませんか。この記録が学校のない時期である八月とはいえ、ここ数年では五月から九月までしっかり暑くなってきました。それなのに、ずっと変わらぬ徒歩通学ではどうなのでしょう。

西中では日傘の使用や、体操着登校が許可されているといってもこの暑さと湿度、日差しのトリプルパンチには体が耐えられません。それに熱中症で救急搬送された方は年々増加しているそうです。そこまでの危険を冒してまでわざわざ行く必要があるのでしょうか。そのようなリスクを負うよりも夏の暑い間だけ、家でリモート授業を受けられるようにすればよいのではないのでしょうか。そうすれば、学びの場は奪われず、なおかつ暑い中学校に行かなくてもよくなります。そして感染症に感染しているが授業に出られるぐらい元気という場合でも受けることができるというメリットがあります。

しかし、そうするといくつかの問題が発生します。一つ目は、

コミュニケーションの場が減ってしまうことです。学校は社会的な決まりや組織的な仕組みを知るという目的もあるそうです。リモート授業によって、学校というコミュニケーションの場が減ってしまうと、今後の生活に大きな問題が起こるかもしれません。二つ目は、パソコンが故障したときに直ぐに対処できないということとです。経年劣化により故障しやすくなっているかもしれません。それだけでなく、使用している間に意図せず壊してしまう場合もないとは言いません。最後に三つ目、できる科目が限られてしまうところです。これらを通して、今、現在の時代では学びには学校という場が必要不可欠なのだと感じました。

では、どうしたら暑さから身を守りながら、今と変らぬ内容を学ぶことができるのでしょうか。例えばですが、送迎バスを出せばよいのではないのでしょうか。そうすれば、暑さから身を守りながら学校に行くことができます。一見、送迎バスは運転する人の人件費に加え、燃料費、バスを買うお金など経済的にもものすごく負担がかかるのであまり現実的ではないように感じられると思いますが、実際国内でも、国の補助を受け、送迎用のスクールバスが導入されている地域もあるそうです。

ですが、文部科学省の規定によると、僻地であることや、学校から家まで中学生で六キロメートル以上、小学生でも四キロメートル以上の場合など一定の基準を満たしていないと国から補助は出せないとあります。しかし、四キロメートルは徒歩だと西中から座間市にあるコストコぐらいだそうです。小学生でもこの距離を歩かないと基準に満たないなど、異常気象で暑すぎる今の世の中では、救急搬送が続出し、医療が逼迫してしまします。

総務省のデータによると五月から九月までの熱中症の搬送者

数は年々増え、令和六年では全国で九七、五七八人だそうです。「熱中症とみられる症状」の人は含まれていないので、もっといってもおかしくありません。逼迫した状態で救急車が不足し、他の病によって体調が悪くなっている人の命が粗末に扱われるのなら、送迎バスを導入したほうがよりたくさんの方の命の危険を未然に防ぐことができると思います。そして、送迎バスを昼間（学生が使用しない時間帯）はコミュニティバスとして活用すれば、本数が増えて地域の人もバスを利用しやすくなるのではないのでしょうか。

物事は変えないほうが楽な場合が多いので、見て見ぬふりをしていますがちですが、私たちの力じゃどうにもできない自然がこれだけ変化しているなら、私たちも少しずつ変わるべきだと思います。先延ばしにすればするほど、事態は深刻化し、やがて尊い命に関わる重大なことに発展しかねません。などと言ったら少し大げさに聞こえるかもしれませんが、それは悪夢ではなく近い未来に起こることかもしれません。それだけ日本の暑さは想像しているよりもずっと危険で、命に関わることです。今回私は暑さと登校についての主張を書きましたが、あくまで私が思う問題の一つにすぎず、またそのすべてが実現するとは思いません。ただ、やれ模索中だ検討中だ何だと先延ばしにせず、今の状況をよりよい未来に繋げられるよう発信し続け、伝統も変化も大切に、そして命を大切に考えられる国になっていけるようにしていきたいです。

佳作

「命を考える」

栗原中学校二年生 原 暖

私には2歳と1歳の妹がいる。小学校5年生の9月と、中学校1年生の4月という時期だったこともあり、二人の誕生はとても鮮明に記憶に残っている。また、2歳の妹については、母の出産に立ち会っていることもあり、より“誕生”を身近に経験した。

世界では、年間出生数は約1億2,100万〜1億3,800万人と言われており、日本では、68万6,061人と報告されている。一見多く見える数値だが、昭和48年では209万人に達しており、現代は三分の一ほどの数値に減少している。年々出生数は最低を更新し続け、政府は様々な少子化対策を講じているが、妊娠・出産・育児はそれらで解決できるほど、簡単なことではないことを私は母を見て少しは知っているつもりだ。

母からは、私を妊娠した時も“つわり”で苦しんだと聞いていた。聞いただけではどれだけ大変なことなのか理解することはできなかったが、実際に一人目の妹を母が妊娠した時に目の当たりにしたのだ。

母の妊娠がわかって少ししてから、母は毎日吐くようになった。食べても食べなくても、飲んでも飲まなくても、定期的にトイレに吐きに行っている様子を見ていた。そんな中でも、まだ働いていた母は仕事に行き、ご飯を作ったり洗濯物を干したり、自分た

ちのこともやってくれていた。あまりに酷い時は、父がやったり、夕飯を買ってくることもあった。その時は、私にも何かできることがないかと思いい、お米を炊いたり、ご飯の準備をしたり、できる限りの事を頑張った。それは、母が辛そうにしている姿を見て、可哀想と思うのと同時に、今思えば、子どもながらになんとなく、「命を育てている」と言うことに、尊さを感じたからなのかもしれない。

それからしばらくして母の“つわり”も終わり、安定期に入り、性別も女の子とわかった。弟よりも妹の方が良いと思っていた私は少し嬉しかった。母の仕事も産休に入り、あつという間に出産予定日になった。

当日、私と父は看護師さんに案内され防護服を着て分娩室に入った。すでに分娩台に座っている母を見て、「ついに産まれるんだ」と思った。だが、前日からお腹の中で心拍が不安定と言われていた妹は、母がいざ産もうとしている時も心拍が弱く、すぐに吸引されることになった。そうして妹は元気に泣いて誕生した。吸引の影響で、妹の頭には少しコブできていた。

生まれたての赤ちゃんは思っていたよりもずっと小さく、すぐ壊れてしまいそうな存在だった。私もすぐに抱っこさせてもらい、やはり「軽い」と思った。

母と妹が退院してからは毎日育児を見てきた。妹は本当に可愛く、必要に応じてミルクも作りオムツも変えた。離乳食が始まれば作ったりあげたりして、できることを手伝い、乳幼児を育てる事の大変さを、今でも進行形で少し経験している。

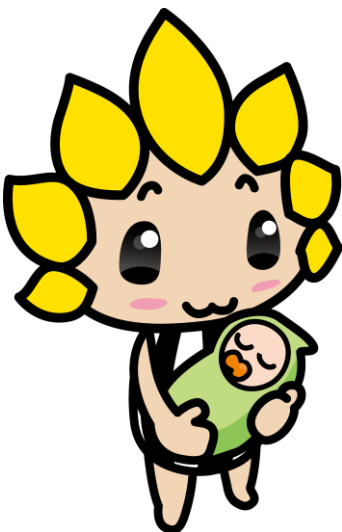
一人目の妹が1歳になろうとしていたころ、二人目の妹ができることを知った。また母を妹に取られると思ったら少し悲しくも

なったが、やはりまた母の酷い“つわり”を見て、一年前に感じた“尊さ”をより現実的に感じながら、1歳の妹を積極的にお風呂に入れたりできることをして、二人目の妹を迎え入れた。

二人の妹の誕生を見てきた私は、誕生について少しだけ、どれだけ大変で、奇跡なのかを理解できたと思う。そして奇跡の目撃者になれたこともまた奇跡だと思う。

命の誕生の仕方は一つだが、亡くなり方はいろいろある。老衰・病氣・事故、そして自殺など、様々ではあるが、私は、誕生の奇跡と同じくらい、自分の命を素晴らしい使い方をして、全うしたい。

最後に、妹たちの誕生・成長を見てきて思ったことは、命は育てるものだという事。母のお腹の中でトツキトオカ命を守り育てられ、生まれて来てからも、両親や関わる方たちにその命を大事に守り育て続けてもらう。自分の命はまだまだこれから、いろいろな方に育ててもらふことになるだろう。そう育ててもらふように、そしてこれからもう育ててもらふように、妹たちの命も、両親と一緒にそばで育てていきたいと思っている。



審査を終えて

審査委員 新井 つる子

「座間市中学生の主張作文コンクール」は、四十五回目を迎えました。

今年の応募作品については、次の九つの課題に対して、応募総数一二八五点の作品が寄せられました。

- 一 私たちと環境保護
- 二 命を考える
- 三 私が社会や他人のためにできること
- 四 私の学校生活
- 五 私と家族
- 六 こんな大人になりたい
- 七 私の人生への夢
- 八 ネット社会に生きる
- 九 身近な国際化を考える

その中から本作品集には、市長賞、議長賞、教育長賞、佳作に選ばれた全九作品を掲載しました。

受賞された皆さん、おめでとうございます。ご家族をはじめ、先生方や生徒の皆さんには、ぜひ、ご一読いただき、作品の素晴らしさを実感していただきたいと思います。

以下、審査の感想や所見のまとめを紹介することで、選評とします。

『私たちと環境保護』には、修学旅行で訪れた京都で、文化財保護に関心を持った筆者が、文化財を未来に残していくために、伝統の技と現代の技術、それぞれの良さを生かして工夫を重ねていく意義について考えた作品がありました。また、保存するだけでなく、町家カフェや宿泊施設など、未来でも活用できる形で文化を受け継ぐ大切さにもふれています。文化財を守ることの意味と、文化を次世代につなぐ責任を感じさせる内容でした。

『命を考える』には、さまざまな視点から命の尊さを見つめた作品がそろいました。

生まれたとき、生死の境をさまようほど危険な状態だった筆者が、今は元気に過ごせていることへの感謝を綴った作品がありました。当時お世話になった医師や看護師の方々の温かい言葉や優しさにふれ、命を守るために尽くしてくれた人々の存在を知った筆者は、感謝と尊敬の気持ち深めています。「周りの人を大切にし、日常のすべてに感謝できる人でありたい」という思いの書き出しから、当たり前に思える毎日が奇跡のように尊いことを実感し、「命を全うすることが恩返しになる」と真っ直ぐに伝える、心のこもった文章でした。教育長賞を受賞しています。

また、年の離れた妹たちの誕生と成長を通して、「命を育てることの尊さ」に気づいた作品がありました。辛いつわりの中でも、仕事や家事をこなしながら、お腹の赤ちゃんを大切に育てる母の姿に命の尊さを感じています。生まれる命を見守りながら、自分も多くの人に支えられて成長してきたことに気づいた筆者が、これからは妹たちの成長を

見守り、共に命を育んでいこうとする姿勢に、温かい優しさが感じられました。命のつながりを実感できる作品でした。

命を考える中で、異常気象による猛暑や熱中症被害など、自然の変化が脅かされている現状を見つめた作品がありました。暑さの中での徒歩通学に疑問を持ち、リモート授業や送迎バス導入など、現実的な解決策を提案しています。自然の変化を「命に関わる問題」として捉え、先延ばしにせずに考える姿勢が素晴らしく、命を守るために今できることを真剣に考えていました。

『私が社会や他人のためにできること』には、「面倒くさい」「汚い」とトイレ掃除を嫌がっていた筆者が、黙々と丁寧に掃除をしている清掃員さんの姿に心を動かされた作品がありました。「見えないところで支えてくれている人に目を向きたい」という気づきへと変わった筆者の姿が印象的でした。日常の小さな体験から他人の行動の尊さに気づき「自分も誰かのために行動したい」と思う姿勢は、社会をより良くする第一歩です。身近なことを通して成長を感じられる心温まる作品でした。

『こんな大人になりたい』には、消防士だった祖父との思い出を通して、自分の将来像を見つめた作品がありました。コロナ禍で家族葬であったにもかかわらず、祖父の葬儀に多くの人が訪れ、祖父が周囲から信頼され愛されていたことを知った筆者は、「たくさんの人を支え、みんなに愛される大人になりたい」と強く感じます。祖父との思い出を通して人を大切にし、尊重することの大切さを学んでい

ます。祖父の人柄や仕事の大変さ、温かい家族の絆が具体的に描かれ、感謝と尊敬の思いが自然に伝わってきました。

『私の人生への夢』には、不登校だった筆者が、好きな音楽ユニットとの出会いをきっかけに、「そのユニットのギターを手に入れて、自分で演奏できるようにになりたい」という夢を持つようになった姿が描かれています。夢を持ったことで一歩を踏み出し、少しずつ学校にも通えるようになった筆者。ギターの練習だけでなく、夢をかなえるために勉強にも前向きに取り組む姿が、素直な言葉で表現されていました。

『身近な国際化を考える』には、夏休みに訪れたホテルで出会った、ミャンマーから技能実習生として働く女性との交流をきっかけに、国際化について考えた作品がありました。なぜ彼女は日本で働いているのかという問いから、技能実習制度や日本社会の現状を調べ、外国人労働者が社会を支える大切な存在であることを理解し、都合の良い存在として扱ってはならないと考える姿勢に、筆者の誠実な思いが感じられました。身近な体験から社会問題を見つめる、意義のある作品でした。議長賞を受賞しています。

市長賞には、西中学校一年生の成瀬隼一さんの「三十分ごとの夜が教えてくれたこと」が選ばれました。

中学一年の春、がんで母を失った筆者が、母との最期の時間を自宅で過ごした経験を、落ち着いた語り口で綴った作品です。感情を抑えた表現だからこそ、母への深い愛情と喪失の悲しみが静かに伝わってきます。「命は当たり前前に

あるものではない、今日ある命が明日もあるとは限らない。だからこそ命は何よりも大切にされなければならない」という筆者の言葉が胸に響きました。母が教えてくれた「命の重み」をこれからの自分の支えとして、「今日ある命に感謝し、明日を精一杯生きよう」とする姿勢に、強い決意が感じられました。冷静な言葉の中に真実の思いが滲み出る、心に深く残る作品でした。

主張文を読む中で、気をつけるとよい点やもう少し工夫ができそうだと感じたところをまとめてみました。今後の参考にしてください。

- 一 テーマを「自分ごと」にし、自分の体験や身近な出来事から考えを広げると、説得力のある文章になります。
- 二 一番伝えたいこと（主張）をはっきりと伝え、体験や理由を入れて、主張を支えましょう。
- 三 感情を込めることも大切ですが、「どう考えたか」「どうしたいか」に重きをおくと、読みごたえのある主張文になります。
- 四 提出する前に推敲し、語彙を工夫したり、他人に読んでももらったりすることも効果的です。

なお、応募にあたり、熱心にご指導くださいました、各中学校の諸先生方に、深く感謝申し上げます。

審査員（敬称略・順不同）

高橋泰代	（座間中学校 教諭）
澤田翔吾	（栗原中学校 教諭）
小金美月	（南中学校 教諭）
田附和枝	（教育指導課 指導主事）
新井つる子	（教育研究所 教育相談員）
平田理絵	（こども育成課 青少年育成指導員）
人見智子	（青少年指導員協議会 青少年指導員）
鈴木陽子	（青少年指導員協議会 青少年指導員）
塩見千草	（青少年指導員協議会 青少年指導員）

第四十五回（令和七年度）座間市中学生の主張作文コンクール入賞者作品集

中学生の主張

（令和七年十一月発行）

編集発行

座間市青少年問題協議会

座間市こども未来部こども育成課

電話　〇四六（二五二）八四〇五



シンボルマーク

（制定 平成3年4月）

座間市の頭文字「Z」をモチーフにしつつ、中央のラインは市内を流れる川を楕円は太陽と市の豊かな自然をそれぞれイメージしました。

21世紀に向かって“みなぎる活力とやすらぎが調和するときめきのまち”の実現をめざすシンボルとして制定されました。